

## 白杉独占理論にかんする若干の考察

——経済学の方法と体系——

一 井 昭

は し が き

周知のとおり、白杉庄一郎氏が経済史・経済学史および経済理論の各分野において注目すべき見解をしめされてきたことは、いまもなおわれわれの記憶にあたりしい<sup>1)</sup>。しかも、白杉氏がいつの日か『現代資本論』ともいうべき「現代経済学批判体系」の確立を構想されながらも、いわばその第1巻にあたる独占資本の直接的生産過程を理論化された『独占理論の研究』を公けにされた矢先に急逝されたことは、少なくとも学界の大きな損失であった。しかしながら、白杉氏は他界されたとはいえ、数多くの論者がそのご今日にいたるも白杉理論を検討し続けている事実<sup>2)</sup>は、残された理論的内容・遺産の深さを物語ってい

- 1) 白杉庄一郎氏は遺稿をふくめて大きな著作を残されたが、そのうち公刊された主要著書をしめすと、つぎのとおりである。

『国民経済学研究』（弘文堂）1939年

『近世西洋経済史研究序説』（有斐閣）1950年

『絶対主義論批判』（三一書房）1950年

『資本主義成立史の原型』〔第一分冊〕（有斐閣）1952年

『価値の理論』（ミネルヴァ書房）1955年

『経済学史概説』（ミネルヴァ書房）1956年

『絶対主義論』（日本評論新社）1957年

『独占理論の研究』（ミネルヴァ書房）1961年

『独占理論と地代法則』（ミネルヴァ書房）1963年

- 2) 白杉理論にかんする文献は多数にのぼるが、1962年7月以降の主要文献として、つぎのものをあげよう。なお1955年10月から1962年1月までの関連文献については、杉原四郎氏の「白杉博士の業績解説」（『白杉庄一郎博士追悼論文集』学生刊行委員会、1962年3月所収）をみられたい。

松尾博「資本主義の精神と重商主義的商業資本——白杉博士の資本主義精神起原論」、『彦根論叢』第89号所収。

北原勇「市場構造と価格支配——独占価格論序説」、『慶応義塾大学経済学年報5』所収。

平瀬巳之吉「白杉独占理論の構造——特別剰余価値は独占利潤の源泉でありうるか」、『立命館経済学』第11巻第1・2号所収。

田口芳明「『独占的剰余価値』説の再構成」、『経済学雑誌』第47巻第3号所収。

吉田茂芳「いわゆる使用価値の捨象について——岡崎氏による白杉教授批判の検討」、『龍谷大学経済学論集』第2巻第3号所収。

井上周八『地代の理論』理論社、1963年。

岡崎栄松「価値論」、『マルクス経済学講座』第1巻、有斐閣、1963年所収。

重田澄男「独占利潤」、『マルクス経済学講座』第2巻、有斐閣、1963年所収。

本間要一郎「独占価格・独占利潤論」、『現代帝国主義講座』第V巻、日本評論新社、1963年所収。

松田弘三「独占的剰余価値と価値・価格理論——平瀬教授の白杉独占理論批判の検討」、『立命館経済学』第11巻第5・6号所収。

る。

ところで、現代資本主義の理論的解明にとって、独占利潤・独占価格論を明らかにすることは、きわめて重要な課題といってよいであろう。白杉独占理論はまさにこのような課題に立ちむかうべく登場してきた。白杉独占理論の特徴の一つは、独占利潤の源泉を生産過程からときおこし、周知の独占的剰余価値＝特別剰余価値固定化説を主張されたことにある。氏の見解にたいしてはさまざまな評価を生んでいるけれども、より科学的な評価をおこなうためには、その見解の立脚する価値論のみならず、できうれば経済史・経済学史における氏の一貫する見地とを、動的に総合した十分な検討に俟たねばならないと思われる。

---

井上晴丸「いわゆる『平均化原理』と『限界原理』——白杉理論への疑問」、『立命館経済学』第11巻第5・6号所収。

松尾博「独占的剰余価値論の基礎理論——平瀬教授の白杉説批判によせて」、『彦根論叢』第93号—96号所収。

金子ハルオ「簡単労働と複雑労働」、『経済と経済学』第10・11号所収。

大島雄一「独占利潤の法則について——いわゆる白杉理論の一検討」、『経済科学』第10巻第3号所収。

経済理論学会編『独占資本主義の研究』青木書店、1963年。

真実一男「『資本論』具体化への苦闘」、『経済評論』1963年12月臨時増刊号所収。

大内力・柴垣和夫「経済学体系における『資本論』の位置づけ」、『資本論講座』第7分冊、青木書店、1964年所収。

松尾博「差額地代論と独占的剰余価値論——白杉博士『独占理論と地代法則』の刊行によせて」、『彦根論叢』第101・102号所収。

大島雄一「市場価値論論争」、『資本論講座』第4分冊、青木書店、1964年所収。

常盤政治「独占価格論」、『資本論講座』第4分冊、青木書店、1964年所収。

西口直次郎「『独占理論と地代法則』批判——差額地代の根拠について」、『経済学雑誌』第50巻第6号所収。

西口直次郎「社会的価値の『限界原理』——白杉教授の期間規定について」、『経済学雑誌』第51巻第1号所収。

入江節次郎「イギリス独占資本究明の方法論(1)・(2)」、『同志社経済学』第13巻第6号および第14巻第1号所収。

大島雄一「独占利潤の源泉について」、『経済科学』第12巻第2号所収。

大島雄一『価格と資本の理論』未来社、1965年。

齊藤悟郎「価値概念と価値論争——白杉博士の所説に因みて」、『新潟大学法経論集』第13巻第4号所収。

高須賀義博『現代価格体系論序説』岩波書店、1965年。

清水嘉治『帝国主義論研究序説』有斐閣、1965年。

松田弘三「独占利潤・独占価格論の展開のための覚書(1)・(2)」、『東洋大学経済経営論集』第43・44号および1967年特集号所収。

手嶋正毅『日本国家独占資本主義論』有斐閣、1966年。

石渡貞雄『現代資本論Ⅰ』御茶の水書房、1967年。

入江節次郎『帝国主義論序説』ミネルヴァ書房、1967年。

岡崎栄松『資本論研究序説』日本評論社、1968年。

寺園徳一郎『資本と競争』ミネルヴァ書房、1968年。

井上周八「『差額地代』と『価値』(1)・(2)・(3)——白杉庄一郎教授の所説に関連して」、『立教経済学研究』第22巻第2号・第3号および第4号所収(なお、(8)で「一応完結」との私信をうけた)。

齊藤悟郎「価値論の方法——所謂『使用価値の捨象』について」、『新潟大学経済論集』第3号所収。

しかしながら、非力な私にとってはそのような能力はない。白杉独占理論そのものにかんしても、私は三つの不十分な論稿<sup>3)</sup>を書いたにすぎない。すなわち、「独占利潤の解明」・「白杉理論における一疑点」および「マルクス市場価値論の一解釈」がそれである。第一の論文では、独占資本主義のもとの価値法則の貫徹の仕方・様式と独占利潤との連関を密着してとらえようとし、あわせて平瀬日之吉氏の独占利潤の「流通主義」的把握を批判しつつ宇野弘藏氏に代表されるいわゆる「宇野学派」の経済学方法論・理論的内容と対立することを強調し、基本的には白杉氏の独占利潤論を支持した。そのさい留保しておいた『価値の理論』においてのべられた使用価値による価値規定側面という氏の一つの中心的構想と『独占理論の研究』における独占利潤＝特別剰余価値の「第一の」実体的基礎たる「独特の社会的評価」との関係についての私の疑問を展開したものが、第二論文であった。そのご第三論文では、『資本論』第3巻第10章の示唆にみちびかれて、市場価値水準そのものの規定は再生産条件とのかかわりあいにおいて長期動態化されるべきであるという自らの積極説を理論的に体系づける手がかりをえはじめている。

なお、独占資本主義研究の方法的問題にかんして、私は「『資本論』の具体化」とよばれる体系化構想のうえに近年における「現代帝国主義論」体系構築説の成果を理論的に包摂・整序することが必要でありまた可能だと考えているが、その点については私の別稿を参照されたい<sup>4)</sup>。

本稿の目的は、白杉氏の経済理論の方法と性格とを明らかにする一助として、これまで顧みられることの少なかったと思われる氏自身の論文「理論経済学の方法についての一つの覚書」<sup>5)</sup>を白杉理論形成の歩みのなかに位置づけ、その「覚書」の内容がどのように白杉独占理論の特質に関連しているかを考察することにかざられている。

## I 白杉独占理論に占める「覚書」の位置

### (1) 『価値の理論』・『独占理論の研究』における方法論断片

『価値の理論』の刊行は1955年7月であり、序文(5月執筆)はつぎのことを明示している。

3) 三つの論稿とは、くわしくは「独占利潤の解明」(『白杉庄一郎博士追悼論文集』学生刊行委員会、1962年3月所収)、「白杉理論における一疑点——『価値の理論』の中心的構想と独占利潤＝特別剰余価値の「第一の」実体的基礎としての「独特の社会的評価」との関係」(『金融研究』第3号立命館大学金融研究会、1963年8月所収)および「マルクス市場価値論の一解釈——独占価格論への上向的一契機」(『立命館大学大学院学報』創刊号、立命館大学大学院生協議会、1965年4月所収)である。

4) 拙稿「戦後わが国における独占資本研究の方法について——一つの覚書」、『商経論叢』第18号、鹿児島県立短期大学商経学会、1969年7月所収。

5) 白杉庄一郎「理論経済学の方法についての一つの覚書」、『彦根論叢』第25号、滋賀大学経済学会、1955年5月所収。以下ではこの論稿を、たんに「覚書」と略記する。なお白杉庄一郎氏のこの論文は、表題に方法論をうたった唯一のものであるが、公刊著書のなかに収められることがなかった。

i) 経済理論の一つの領域たる価値論は、白杉氏の研究当初からの主要なテーマであったが、軍国主義日本の当時の情勢から研究困難となり、戦後ようやく1952年以降<sup>6)</sup>「年来の構想」に形をあたえられたのが、『価値の理論』として結実した。

ii) 白杉氏は長年にわたる経済学史研究の一応の結論として、経済学体系化にふれられつつ、つぎのように経済学の歴史的発展の全成果の位置づけを要約されている。

「……経済学の歴史的発展の全成果は、畢竟、マルクスを創始者として現在その真理性が世界史的に実証されつつある社会主義経済学<sup>7)</sup>に包摂されうる」と<sup>8)</sup>。

iii) 白杉氏による経済学批判体系プランの構想に深くかかわりあう資料として、「遺稿目録」の篇別プラン<sup>9)</sup>ならびに『価値の理論』序文におけるつぎの指摘を考慮せねばならない。

---

6) この時期の画定については、杉原四郎「白杉博士の経済理論体系について」(『独占理論と地代法則』所収) 1—2 ページ参照。

7) なお、白杉氏はソ同盟『経済学教科書』を、「社会主義経済学創造への一里塚」と評価されている(『価値の理論』序文 4 ページ参照)。

8) 白杉庄一郎『価値の理論』序文 2 ページ。

9) その「経済理論体系」の篇・章のタイトルを抜きだせば、つぎのとおりである。

第1篇序説

第1章経済

第2章経済学

第3章理論経済学の発達

第2篇価値の理論〔くわしくは『価値の理論』の章別プランを参照せよ〕

第3篇剰余価値の理論〔遺稿「剰余価値の理論」ではより具体化されている〕

序言

第1章生産の一般的規定

第2章資本制生産の成立

第3章資本の生産過程その1——絶対的剰余価値の生産——

第4章資本の生産過程その2——相対的剰余価値の生産——

第5章資本の生産過程その3——資本の蓄積と独占の成立——

第6章独占的剰余価値の生産

第7章資本制生産から社会主義的生産への移行

第8章社会主義的生産——社会主義社会における剰余価値を中心として——

第4篇価格の理論

第1章価値の生産価格への転化

第2章自由競争価格

第3章独占価格

第4章インフレーション

第5章社会主義価格

第5篇所得の理論

第1章労賃

第2章利潤

第3章利子

第4章企業者利得

第5章地代

第6章社会主義社会における所得範疇

第6篇経済成長と景気循環の理論

第1章再生産と経済成長

<第2章>景気循環論

(白杉庄一郎『独占理論と地代法則』, 218—225ページ参照。)

なお、『価値の理論』における「篇別プラン」のうち、「利潤の理論」と「恐慌の理論」とは、うえにみられるように、「第5篇所得の理論」と「第6篇経済成長と景気循環の理論」に変更されており、そのご「第7篇外国貿易と世界経済の理論」がつけくわえられたのである。

「私は、ここに展開した価値の理論を基礎として、その上に、いつの日か、ひきつづき順序に、剰余価値の理論(生産論)、価格の理論(流通論)、利潤の理論(分配論)、恐慌の理論(再生産論)を展開することができたならばと考えている。」<sup>10)</sup>

みられるように、われわれは白杉庄一郎氏の経済理論体系構想のもつ内容を、あらためて「ほぼ『資本論』の骨子とするところから従って展開されうる<sup>11)</sup>」ことを確認してよいであろう。氏の言明される「『資本論』の見地に立つ」ということは、うえにみた体系プランとともにその研究姿勢にも重点がおかれていた。すなわち、①ブルジョア経済理論の成果をたんに否定してしまうことなく、批判的に摂取すべきこと<sup>12)</sup>、②『資本論』研究は訓詁的に終始することなく、「社会主義経済の理論体系にまで発展せしめられうる可能性をふくんだものとして前向きに理解してかかるときにのみ初めて、我々は『資本論』のすべての含蓄を全面的に開花させることができる」という見地を包括したものが、氏の研究姿勢の要諦である。

これまでみたかぎりでは、戦後活発に論議されてきたいわゆる「『資本論』のプラン問題」そのものには、氏自身直接言及されてはいないけれども、しかしながら氏独自の見地から1950年以降において、社会主義経済学体系に自らの経済理論を整序・構成するという基本的な体系化構想を明確にされていることを知ることができる。さらに、白杉氏はさしあたり独占資本主義論の篇別を中心とした体系化の構成をかなり仕上げられており、そのさい「人間の解剖は猿の解剖にたいする一つの鍵である」という命題を社会主義経済研究にたいする資本主義経済研究の關係にあてはめることを力説され、なお重要なことに、氏が『ゲルントリッセ』をふくむ『資本論』体系をして、いわば「現代経済理論体系」の骨子ないしその展開プランの基礎という地位をあたえられていることである。

これまで白杉理論の方法と体系化構想にかんして、氏自身の『価値の理論』序文の言明を中心に紹介してきた。

つぎに、氏自身の手になる生前最後の著書『独占理論の研究』に簡単に言及しておきたい。同書の刊行1961年4月は、前著『価値の理論』公表の約6年後にあたるが、1957年10月からものされた氏の独占研究既発表諸論文が同書の大半を占めている。

同書の序において、氏は理論上の重要な問題を提起されている。ここでその点について詳細に検討する余裕はないが、つぎのようにいってよいだろう。一つは独占的剰余価値範疇の定立であり、他はそれに連関する独占理論体系化に果たす平均原理の限界原理への自

10) 白杉庄一郎『価値の理論』序文6ページ。

11) 白杉庄一郎、前掲書、序文3ページ。

12) 白杉氏はこの点に関連して、教条主義・セクト主義とプロレタリア的・党派性とを区別して前者を批判されている。

己疎外という資本主義の異なる歴史的発展小段階に占める二原理相互の内的関係の理論化であった。

これらの独占解明のための重要な理論的・方法的武器は、方法論的には『価値の理論』序文に先だつ1955年5月に公表された「理論経済学の方法についての一つの覚書」が、体系化構想にてらして『価値の理論』と『独占理論の研究』との媒介環をすでに形成しているかどうかという興味深い研究課題をわれわれにせまることになる。つぎにその点に歩をすすめることにしよう。

## (2) 「覚書」内容の要約

### i) 「理論経済学」の課題

白杉氏はまず、経済学の性格規定について新カント学派の学問分類とは全く無縁であることを明らかにされつつ、それはF・エンゲルスのいう一般性・法則性を析出する歴史科学であると位置づけられたうえで、経済現象における共通性・一般性の側面を基盤とした経済生活の一般化ないし法則化を目標とする理論的科学の成立可能性が生まれ、「このような理論経済学を前提することによって初めて、個別化的科学としての経済学……の成立が可能性をもってくるのである。けだし、方法論上は新カント学派の文化哲学に依拠するM・ウェーバーも認めているごとく、個別性の認識はかえって『型』の一般性によって媒介されることによってのみ可能なものであるからである<sup>13)</sup>」とのべられている。

しかも白杉氏によれば、この「型」はM・ウェーバーの場合と異なるがマルクスも『資本論』における究明の「究極の目的」とした「近代的社会の経済的運動法則」もまた一つの「型」とされる。その理由として、マルクスのつぎのような言明をよりどころとされている。つまり、資本制的生産様式およびこれに照応する生産ならびに交易諸関係の理論的展開の主要な例証として「過程の純粋な過程」を保証する典型的場所をイギリスにもとめたこと、そのさい問題なのは資本制的生産の自然法則そのものであり傾向であり、「産業的に一層発展した国は、発展のおくれた国に対し、はかならぬそれ自身の将来の姿を示す<sup>14)</sup>」という言明である。

白杉氏はM・ウェーバーの「型」をたんなる「理想型」(Idealtypus)であり「歴史的な個別性認識の手段にとどまる<sup>15)</sup>」として正当にそれを批判されているのであり、さらに「『型』は現実的・理想的なものとして、歴史的現実のうちに内在し、それに実現される

13) 白杉庄一郎「覚書」2ページ。傍点は引用者。

14) K.Marx, *Das Kapital*, Volksausgabe besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau Dietz Verlag, Berlin, 1960, Bd.1, S. 6. 長谷部文雄訳『資本論』青木書店版, 第1部上, 71ページ。

15) 白杉庄一郎「覚書」2ページ。

ものとして発見されるのでなくてはならない。そうしたものとして『型』は、物質的自然の因果的法則に近い一般性と必然性をもつ。そして、このような『型』それ自体を経済生活の領域において探求することが、理論経済学の課題にはかならない<sup>16)</sup>」とされるのである。

それにもかかわらず私にとっては、白杉氏後年の「平均原理」の支配と「限界原理」の支配とを長期的・短期的原理として、資本主義の自由競争段階と独占段階とではその顕現の仕方が交替するという構想は、つぎのような「型」の強調に暗示されているように思われる。

「しかし、経済学上の法則は、他の社会科学上のそれと同じく、自然科学上の法則と全く相等しいわけではない。社会的存在に関する法則は歴史的にして相対的な法則であり、したがって、すべての時代とすべての社会に一樣に妥当する一般的な法則ではありえないからである。それは一定の時代と一定の社会に特有の法則である。もとより、抽象によって一般的な法則を定立することは可能である。……しかし我々はそのような一般的な法則をもって特定の時代と社会の経済現象を説明することはできない。一般的な法則は自己を特殊化することによってのみ、初めて、特定の時代と社会への妥当性を獲得しうるのである。したがって、経済学がまず問題にしなければならないのは、そのような一般的な法則そのものではなく、『型』としての意味をもつ・一定の経済形態に特有な・歴史的にして相対的な法則なのである。」<sup>17)</sup>

ii) 「理論経済学」の方法

うえにのべた「理論経済学」の課題をいかにして解くのかについて、白杉氏はマルクスの『経済学批判』序説・「(三)経済学の方法」にもとづき、「理論経済学」の方法がいわゆる下向法と上向法との統一として把握さるべきであること、その方法がさらに下向と上向との円環運動関係を内包することをいち早く主張されている。

「しかしながら、この二つの方法〔下向法と上向法〕は、単に一方が他方を前提する関係にあるのではなく、両者が相互に前提しあって、一つに統一されていると見られなければならない。すなわち、下向する抽象的分析は単に上向する総合的構成の前提条件をなすにとどまるのではなく、同時にこれを自己自身の目的としているのであり、また逆に上向も下向を前提し、これの目的をかたちづくるものとして、これの前提条件たるの意味を内在させている。かくして下向は上向のためであり、上向は下向のためである。いいかえる

16) 白杉庄一郎「覚書」2ページ。

17) 同上、3ページ（傍点は白杉氏のもので、ゴシックは引用者）。もっともここでは、資本主義社会一般の経済法則をさす叙述と考うべきであろうが、しかしさらにすすめて資本主義の自由競争段階と独占段階との相対的区別を「型」としてとらえられる白杉氏の構想がすでに完成されていたとみうるかもしれない。

と、下向の到着点は上向の出発点であり、上向の到着点は下向の出発点である。かくして、上向と下向とは、そのようなものとして、方向を逆にしながら一線に連絡する。すなわち円環運動を形成する。しかも、思惟の進行上のいかなる時点ないし段階をとってみても、このような関係において二つの方法が $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$ に作用しているのでなければならない。すなわち、下向の研究の一步一步が上向的論理の見えざる手によって導かれているのでなければならないし、上向的叙述のいかなる段階においても下向的分析が前提されているのでなければならないのである。」<sup>18)</sup>

### iii) 論理と歴史との照応関係

現代における経済学の体系化をめざすいくつかの労作が現われているが、その体系化構想のなかに論理的体系化の側面と歴史的展開の側面とをいかに綜合するかについてはかならずしも十分に究明されてはいない<sup>19)</sup>。体系化にあたっては歴史的展開をふまえて、カテゴリーの展開の体系をとくに重視しなければならないと私は考えているが、その基礎をなす論点の一つにいわゆる「論理的・歴史的照応」の問題がある。

白杉氏はこの点についても、当時の学界における学問的水準にてらし、留意すべき考察をつぎのようにしめされている。つまり、「最も簡単な根本概念が出るまでは、概念の順序は歴史の順序とは逆になる。しかし、それが出てしまえば、理論的展開と歴史的展開とはほぼ一致する<sup>20)</sup>」と論理と歴史との照応関係を把握されるのであるが、とくに「理論的な構成が問題である以上、その順序は対象とされている現実の歴史的な成立の順序を基準とすべきではない<sup>21)</sup>」という指摘をあたえられているからである。

### iv) 帰納的方法と演繹的方法

経済学を体系化するにあたって、いわゆる帰納的方法と演繹的方法の果たす役割が、位置づけられねばならない。

白杉氏はつぎのようにのべられる。

「理論経済学の目標とする型が現実的・理想的でなければならないと我々はさきに考えたのであるが、しからば、この二つの型はいかにして結びつきうるであろうか。帰納的方法と演繹的方法とが結びつくことによってである。しかし、そのためには、一方では、帰納的方法が単に $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$ 共通の一般を目標とするにとどまることなく、 $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$  $\dot{\cdot}$ 本質的一般への志向をそれ自体のうちにもつのでなければならない。と同時に、他方では、演繹的方法がその前提たる本質的一般を単なる直観と理想化の所産とすることなく、現実的基礎の上にこれを構成す

18) 白杉庄一郎「覚書」，7—8 ページ。

19) 前掲拙稿「戦後わが国における独占資本究明の方法について——一つの覚書」参照。

20) 白杉庄一郎「覚書」9 ページ。

21) 同上，8 ページ。



るのでなければならぬ。理想化が直観を基礎とすることは事実であるが、本質直観は現実の事実によって媒介されなければならず、現実の事実そのもののおこなっている抽象作用が理想化に方向をあたえるのである。」<sup>22)</sup>

ただし、つぎの文言による方法の具体的展開・運用が、使用価値一般の価値規定参与の裏づけとされたり、独占段階における「虚偽の社会的価値」は資本主義社会独特の社会的評価機構の形成によって実体的基礎をもつという、氏後年の理論的根拠のいわば方法的背景をなすのだとすれば、とりわけ注意して検討されねばならない。

「このようにして二つの方法は両方から歩みよることによって初めて相互に補完しあうものとなるのであるが、それは云いかえると帰納的方法が具体的なものから抽象的なものへ下向してゆく方法に高まり、演繹的方法がその抽象的なものから初めの具体的なものへ上向してゆく方法に高まることによって、弁証法的方法の契機となるということである。科学の方法としての弁証法は、帰納的方法と演繹的方法とを離れて別個に存在するものではなくて、この二つの方法の真実の意味における綜合の上に成立するのである。」<sup>23)</sup>

#### V) 経済学と世界観

上述の帰納的方法と演繹的方法とが結びつくにあたって、一定の世界観ないし歴史観（仮説）——「それまでの帰納を基礎とし、これからの演繹を予想して、洞察ないし直観されるもの<sup>24)</sup>」——が予想されねばならず、その結びつきは弁証法的でなければならない。しかし、「このような本質直観は、厳密な意味の経験科学の領域を超えたものであ<sup>25)</sup>」り、「それは、問題の実在全般の普遍的な世界観的反省によって方向づけられずにはいないし、またそうすることによってのみ可能なものなのである。ここにおいて科学は哲学と結びつく、すなわち経済学は世界観と結びつく<sup>26)</sup>」のである。

しかしながら、「弁証法的ならびに史的唯物論は、そのまゝでは、まだ経験科学の方法ではない<sup>27)</sup>」のであり、マルクスは、「経済学を直接的に史的唯物論によって論証しようとしたのではなく、逆に史的唯物論を経済学によって論証しようとしたのである。そのさいマルクスが企図したのは、史的唯物論をとるといなにかかわらず、何人も承認せざるをえないような論証であった。けだし、そうでなければ科学的論証とはいえないからである。人は、その論証を承認することによって、その科学のもつ認識論と世界観の承認にみちびかれるのである。そして、そこに彼の社会主義が『科学的』と特徴づけられ、あらゆる中傷と罵倒にもかかわらず、よく歴史の風雪に堪えてきた所以があるのでなければならぬ。してみれば、科学の党派性ということを、安易に、初めから特定の世界観と認識論

22)・23) 白杉庄一郎「覚書」, 14ページ。

24)・25)・26) 同上, 15ページ。

27) 同上, 17ページ。

を承認することだと前提してかかってはなるまい。」<sup>28)</sup>

ここには、「科学方法論」と価値判断の問題全般にも関説する白杉氏の含蓄ある見解がしめされており、その一部は『価値の理論』序文に継承されてゆく「教条主義批判」をふくむものである。

以上、白杉独占理論の方法を究明するために、その一助として、従来検討されることの少なかったと思われる「覚書」の要約的介绍をしてきた。「覚書」のなかに、いわば「現代独占資本主義のもとでの経済学批判体系プラン」そのものの展開を見いだすことは困難であるとしても、より広い意味における氏の方法論をうかがい知るにたるかなりまとまった内容を抽象度の高い論理次元で語っておられることだけは、ほぼ確認することができたと思う。つぎに次項において、これまで明らかにしてきた「覚書」での唯物弁証法的・方法論的観点が、白杉独占理論のなかに、どのように貫ぬかれているかを重点的にしめさねばならない。

## Ⅱ 白杉独占理論と「覚書」との内的連関

### (1) 白杉独占理論の「二大特質」

ところで、杉原四郎氏は白杉独占理論のいわば「二大特質」をつぎのように、「独占的剰余価値範疇の定立」と「価値・価格論における平均原理と限界原理の関係」とにもとめられているようである。

i) 独占資本主義の経済法則究明という問題は、白杉氏によれば独占的剰余価値という新しい範疇を中軸とする独占理論によってはじめて、現代資本主義の現実とそのイデオロギーとを無理なく批判できうと考えられたこと<sup>29)</sup>。

ii) さらに、白杉理論の礎石は『価値の理論』ですでにすえられており、その独占理論の核心は価値・価格論における「平均原理と限界原理」についての白杉氏独自の研究のライト・モチーフにあること。

「元来〔白杉〕博士の独占理論は、直接にはマルクスの特別剰余価値論を起点とするが、同時にそれは、マルクスが差額地代に関してのべた『虚偽の社会的価値』の理論を価値・価格に関する平均原理と限界原理についての博士独自の見解によって発展させたことに由来するのであって、その意味では博士の独占理論の礎石はすでに『価値の理論』ですえられていたといつてよい。」<sup>30)</sup>

### (3) 白杉独占理論の問題点と「覚書」との関係

私は白杉独占理論の骨格にかんする問題点として、さしあたりつぎのような見解をもって

28) 白杉庄一郎「覚書」、16ページ。

29) 杉原四郎、前掲論文、8ページ参照。

30) 同上、8—9ページ。

いる。ここではたんに論点の説明の便宜上、一つの《図式》をかかげておきたい（なお、以下で〔 〕のなかにしめす数字は《図式》のなかで○でしめた個所にかかわる論点をさしている）。

i) 独占資本主義の体系的解明の基礎に、資本の直接的生産過程視角からの分析をふまねばならぬことは、強調して強調しすぎることもないほど重要かつ基本的な視角である。そのかぎり「独占的剰余価値」範疇の定立は、白杉理論にとってもきわめて重視すべき理論的柱である。しかも需給一致の大前提（『資本論』第1巻の分析）をはずした（換言すれば、それ自体＝再生産条件が課題となる）『資本論』第3巻第10章の論理次元にあたる「市場価値水準そのものが可変」のケースを問題とされていることは、全く正しいことである。しかし白杉氏の事実上の理論的前提が、「体制認識」ともいうべき独占の支配・強制関係という独占の本質との関連に不明確さを残しているとともに、＜需要過剰・供給不足体制＞の仮説と結びついているように考えられる。これらは、私にとって大きな疑問である。また、恐慌・不況過程を独占段階における社会的再生産過程に位置づけられる方向も、転倒しているといわざるをえない点をふくんでいる。このことは、方法的にはさきに見た「覚書」における「型」の折出の態様と無関係であるとは考えられないであろう〔6〕。

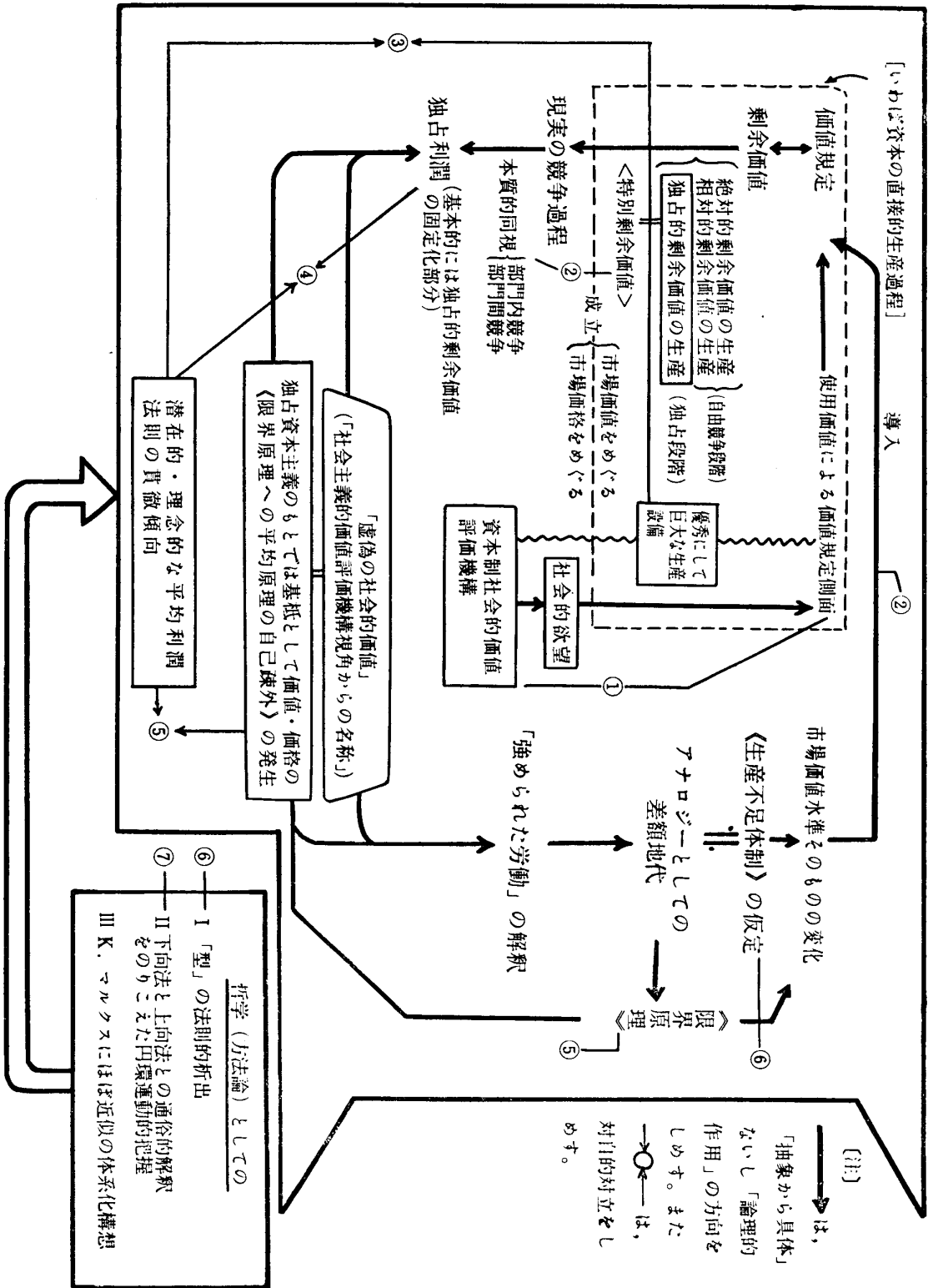
ii) 多くの論者をして語らしめた白杉理論には生産価格次元と価値次元との混同があるという指摘<sup>31)</sup>は、白杉氏の＜円環運動把握の視点＞を正確に理解するとともに、白杉理論の脈絡を詳細に検討するならば、そのかぎりかならずしも混同とは断言できないであろう。この点にかんし白杉氏はなるほど、部門内競争と部門間競争とを範疇的にしいて区別してとりあつかう必要はなく、後者は前者とおなじようにとりあつかうことができるとされている<sup>32)</sup>。このことは現実の競争過程が両者の絡み合い・統一であるということから主張されているのであるが、白杉氏がまだ独占段階における市場生産価格論プロパーにまで体系化されてはいない次元での論点であることにこそ、留意する必要があるであろう〔2〕。

iii) しかし、私にとってむしろ白杉理論の根本問題は、つぎの点にあるように思われる。すなわち、独占資本主義の「型」の法則的析出＝特徴づけにあたって、価値・価格ともに＜平均原理の限界原理への自己疎外＞を、方法的に・全理論体系の枠組に関連させて措定されたことにあり、そのことの意味内容が「平均利潤法則は独占段階においても依然

31) さしあたり、前掲拙稿「独占利潤の解明」270—274ページ参照。

32) 白杉庄一郎氏は重田澄男氏の批判に反批判して、つぎのようにのべられている。「……同一生産部門内の競争の制限と異種生産諸部門間の競争とを結びつけてみれば明らかなことであるが、両者は独立別個に存在するものではないのである。競争制限の二つの異なった方法があるのでもない。同一の方法が二重の意義をもつにとどまる。異種生産諸部門間の競争制限の方法として最も重要なのは資本規模の巨大化であるが、これは実は同一生産部門内の競争制限の最も有効な方法でもあるのである。……そして競争の制限にしようだとすれば、それによって獲得される独占利潤の基本的源泉は、同一生産部門内の競争制限にほかならないことにならなければならないであろう。」（『独占理論の研究』147ページ。）

《白杉独占理論の骨格整理のための一図式》



として潜在的には貫徹する<sup>33)</sup>」とされることとの理論的相互連関＝統一性の不十分さにある。つまり、《図式》においては、白杉氏の論理体系が内的統一(対立物の統一)であらねばならぬとしてしめしておいたが、しかしすべての論理上の環がかならずしも首尾一貫したan und für sichの体系的統一性を保持しているわけではない。この外見的パラドックスないしan sichあるいはfür sichとしての矛盾関係を統一ある全体のなかに位置づけることの困難な形でなお論証過程に個々に残存していることにこそ、私は白杉氏の苦闘をみるものであり、その理論的精髓をさらに展開しうる可能性がふくまれていると考えるものである。より具体的に課題をしめすと、たとえば＜独占的競争＞の内容にかんするが、「参入阻止要因」ないし資本移動阻止要因として働く最低必要資本量の増大と関連する「優秀にして巨大な生産設備」をもつ独占の支配力強化要因すなわち《競争制限要因》は、独占段階においても利潤率均等化傾向を社会的・統一的に貫徹させるいわば《競争促進要因》(お徒革新競争をふくむ)とどのように内的に弁証法的に関連し、しかも独占利潤として「特別剰余価値の固定化」を長期にわたって独占がいかに維持しうるかということがある〔3・4および5〕。

ところで論点は少しかわるが、平均原理と限界原理との関係は、私の考えでは、結局のところ、標準的生産条件を価値法則的にいかに把握するかという問題が、その解決のための鍵を提供するように思われる<sup>34)</sup>。したがって、両者をしいて平均か限界かといった二律背反的原理であるかのように把握しようとする見解には、疑問をもっている<sup>35)</sup>。

iV) すでに少しふれたが、白杉理論における最大の難点——したがってその批判的摂取は逆に積極的・建設的理論課題をなすだろう——は、白杉価値論にある〔1および2〕。すなわち、『価値の理論』において明確にしめされた「商品の価値は単に抽象的人間労働を実体とするものではなくて、その裏側からいえば同時に使用価値一般である<sup>36)</sup>」という指摘は、＜市場価値論＞が問題となる社会的総供給と社会的総需要との再生産条件としての対応関係——『資本論』第1巻価値規定の歴史的・論理的展開の一つのケース——の面にのみ切り離して適用されているのであれば、私は賛成しうるのである。というのは、白杉価値論にはその側面の展開された論証をすでに散見しうるからである。しかしながら、

33) 白杉氏は、つぎのようにのべられる。「……独占的競争のあるかぎり、限界原理の固定的支配をつきやぶって、平均化原理が自己を貫徹しようとする」「……独占段階が独占的競争の段階であるかぎり、競争段階を特徴づける長期的な平均化の傾向もまた完全に抑制されてしまうことはありえないのであって、一物一価格の根柢には一物一価値への傾向が潜在していると見ることができる。」(『独占理論の研究』94および103ページ。)

34) 「独占」の問題について書かれているのではないが、そのような視角から読むときおそらく示唆を与えられるのが、宮本義男『資本論入門』(下)(紀伊国屋書店、1967年10月)、とりわけその「市場価値論」と「地代論」である。

35) 前掲拙稿、149—150ページ参照。

36) 白杉庄一郎『価値の理論』73ページ。

37) 前掲拙稿「マルクス市場価値論の一解釈——独占価格論への上向の一契機」参照。

白杉氏の構想・論理的首尾一貫性は、たんにそのような内容をもつにとどまらず、さきの指摘は価値論一般に拡大されている。すなわち、さらに一例として『独占理論と地代法則』を詳細に検討されるならば<sup>38)</sup>、白杉氏の理論にたいし多くの論者が一般に価格規定にかんすると理解している限界原理は、実はたんに価格のみならず価値にも関与しているからである<sup>39)</sup>。つまり、使用価値による間接的価値規定の側面をうちだされ、次第にはっきりと「社会的欲望→社会的需要→社会的評価→社会的評価機構」というシェーマが、前者の消極的価値参与から価値の実体を担う積極的役割を占めるにいたるところに重要な理論上の意味があるからである。もしそうだとすれば、このような内容をもつ価値論は、マルクス価値論の根本問題にもかかわるとみななければならない。しかも、この理論的位置は、《図式》に明らかなように、白杉独占理論全体系のいわば生命線にもあるいはかかわる重要な柱をなすものと思われるが、それだけに十分な検討を必要とする問題である。

以上、私は白杉独占理論の骨格と「覚書」論点との関連を中心に、重点的に問題点を整理したにすぎない。

## む す び

本稿において、まず白杉理論の立脚する方法論的「覚書」の内容を、これまでほとんど検討されることがなかったがゆえに、やや詳細に紹介した。そのなかで、白杉氏の社会主義経済学に包摂されるという独自の理論体系プランも内容的にはマルクスのとった経済学の方法に依拠したものであり、また「経済学批判体系プラン」にはほぼそったものであることを確認した。

しかも「覚書」のなかに、「型」の析出という白杉氏の問題意識によって、需給一致の大前提自体が究明課題となる論理的次元・歴史的段階における理論的展開の準備が形成されており、また下向法と上向法との＜円環運動＞的統一視角というべき、当時の学界状況からみて通俗的解釈をのりこえたところのすぐれた方法的見地から生みだされてきた科学的成果が、『独占理論の研究』に代表される白杉独占理論として結実してきたことをみた。したがって、白杉独占理論の難解さもそのことに無関係ではないとした。

これらの諸点を明確にしたうえで、つぎに、白杉独占理論に「覚書」構想がいかに貫徹しているかを念頭におきつつ、白杉独占理論を批判的に一そう展開させるために、白杉理論にさしあたり私がどのような理論的問題点を感じているかを重点的に列挙した。

最後に一言。この小稿はむしろ自らの「覚書」とすべきものであり、きわめて一面的かつ不十分な内容にとどまっている。数多くの白杉批判文献をふくめた白杉独占理論の詳細な検討は、別の機会にゆずらねばならない。

(1969. 9. 10)

38) 白杉庄一郎『独占理論と地代法則』第4章、とりわけ150—165ページ参照。

39) もっとも平瀬巳之吉氏と高須賀義博氏とは、白杉氏の価値論を「限界価値論」と解されている(平瀬巳之吉『独占資本主義の経済理論』未来社、1959年ほか; 高須賀義博、前掲書参照)。